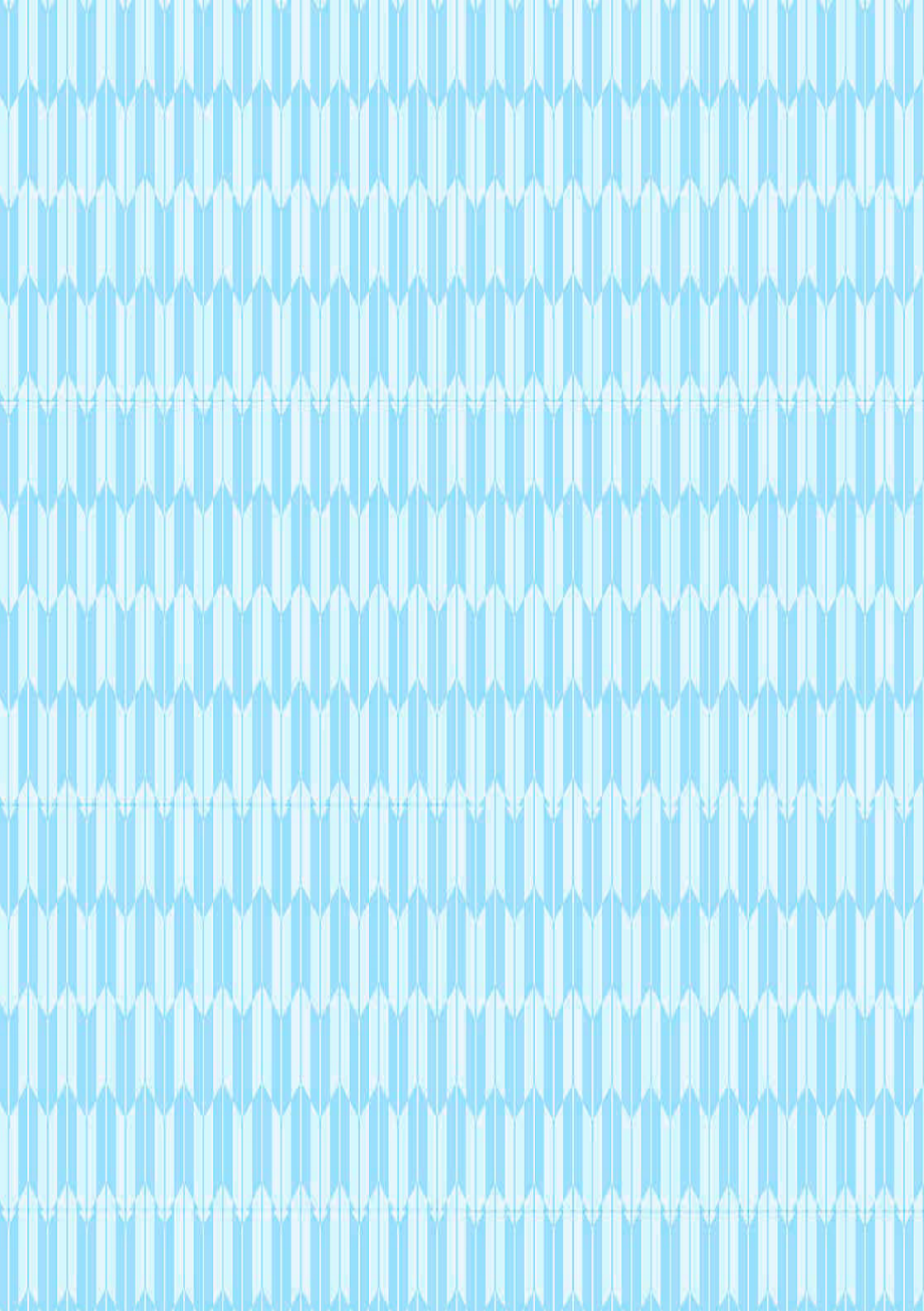


あを 12

2024

行遷堂

老翁の筆
主の風
九十七
同



佐藤竹僊

日

1

江戸下町

十二月集

坐・誹

佐藤 竹僊

山鳩のつれだちあゆむ秋しぐれ

山鳩の舗装路あゆむ秋しぐれ

一木を圍みおしろい咲いてゐる

サンルームに朝のひととき酢莖かな

枯茅の立つてはゐられなくなりぬ



秋しぐれ天水鉢に入りけり

秋じまひ地球も月もよく動く

秋じまひ算へはじめは指を折る

街路樹に秋の深きをおぼえたる

眉月のわたるゆふべをさざんくわ散る

雨あがるしばらくしたら月のぼる

この蟻は強制労働冬の草

天國へ時間つぶしの温め酒

十二月動かなくても消ゆる物



秋

篠田純子

美容師に借りし小説秋の暮

秋深し美容師であり占ひ師

曼珠沙華鷺の捕食の長々と

不意に翔び鷺は梢へ櫓もみぢ

数独解け銀木犀の異次元へ

ヒルズ秋市兵衛町の名の消えて

麻布秋バタたつぷりのクロワッサン



笑顔

篠田 大佳

秋雨や若き鳥のかあと鳴く

旅人に傘は小さし秋の雨

糠雨の街の花壇の曼珠沙華

うそ寒の風に踊れるフェイクファー

秋曇餌が獲れたと鳥鳴く

保護猫を撫づるをとこの手あたたか

旅人はやさしきナード暮の秋

秋日和世界で一番の笑顔を



大谷翔平

須賀敏子

ざくざくと木の実を踏んで神域へ

花咲いて後の茗荷を見つけたり

亜米利加の野球見ながら柿を剥く

歩く距離少し伸ばして彼岸花

ニュータウン紅葉葉楓の色付いて

伸びすぎて斜めに咲けりほととぎす

雨上がり陽の射してこそ薄紅葉



浮間公園

都築繁子

土手半ば刈り残したる彼岸花

秋さやか土手登りきる杖ついて

異国めく風車の小屋や秋日濃し

黄コスモス池の畔の喫茶店

秋蝶の来ており池の木のベンチ

簡単なレシピの料理秋茄子

秋薔薇二胡の調べを聞く夕べ



秋の色

長崎桂子

幼きの涼しさほしき水を撒く
置場所忘れひとひ捜す秋あつし
仲秋や石段のわき涸びし蚯蚓
仲秋の草木伸びみてみどり濃き
露草や雑草の原に際立ちて
拭き掃除をへて窓外秋の色
秋彼岸何はともあれ墓詣で
ラジオ聞くいづくも猛暑堪へる日日
伊勢湾台風六十五周年の式典
名月や雲ふりはなし輝けり



秋夕焼

森
な
ほ
子

桑の実や媼に戦火遠かりし
長生きの媼ふくよか里の秋
行きは二人帰りは一人天の川
公園の端から端まで青松虫
川音へ降りる階段葛の花
麓より夕べのチャイム山は秋
山小屋にカレーの匂ふ秋夕焼
大空の雲みな染まり秋夕焼



柿日和

赤座典子

冬支度のやう秋興の旅支度

空高しTの字の鳶張り付けて

板さんと話弾めり芋茎汁

温泉ゆの染みる踝さする秋の蝶

蕎麦の花に渡る風消す蟠り

落葉松のチェンバロ響く秋野かな

雨催激しく揺れる葛の花

すらすらと赤川次郎柿日和



今年の秋

秋
川

泉

退院の日にひらきたる曼珠沙華

子が走り親が後追ふ秋の虹

おお柿よくつむいても止まらない

秋茄子や今朝目覚めたる夫が居て

次々とうろばかりなり栗を剥く

猫の居た日々なつかしむ秋の夜

この秋は気温の高し木の葉舞ふ



亀虫

七郎衛門吉保

今年米百十円の切手買ふ
秋の風提灯の如コキア揺れ
整然と自由奔放鰯雲
秋の雲イルカやクジラ遊ばせり
山肌を羽裏に見せて秋の空
道端のジグソーパズル金木犀
古街道蓑かポンチョか牧水忌
亀虫の隙間好みやイスラエル
亀虫やいずれもロシアウクライナ
秋芝に白の順路の投票日



十月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

けふからは僕の玉蟲死んだから

佐藤竹僊

青や緑に輝く美しい玉蟲。生きているうちは誰の所有物でもない。自分が捕ったとしても。死んだら初めて物となり、所有できると作者は思う。今は私はあまり見聞きした事がないのだが、昔は夏休みの提出作品の中に、昆虫採集があつた。今は環境破壊で昆虫が減つたためか、無駄な殺生を止める宗教的観点からか、あまり盛んではない気がする。そうだ、今度誰かに聞いてみよう。それにしても「玉蟲の厨子」、あれだけ集めたのは生きていたのか、死んでいたのか？（なほ子）

バス停は「住宅前」と落し水

佐藤竹僊

バスの停留所の名付けは面白く、地域に密着した名称が、都市部などで珍しがられます。経路検索ソフトで「住宅前」という停留所を調べると、全国、北は北海道から南は沖縄まであつて、全国にどのくらい分布しているか調べたら面白そうです。掲句はおそらく、作者の身近なバス停なのでしょう。散歩の途中で、住宅前という珍しいバス停を見つけ、住宅と密接な田んぼが収穫の季節になつていて、香り豊かな風を作者が受けている、という景を思い浮かべました。（大佳）

疲れたと今年限りの水争い

秋川 泉

水争いは、田圃に引く水をめぐる争いのことを指します。掲句から伝わったのは、稲作従事者の高齢化と終わらない争いへの疲弊です。農業従事者の高齢化や後継者不足は、メディアで度々指摘されます。そして、収穫に影響する水争いも長期にわたっているのだらうと思います。歳を重ねて憎しみを許す理由の一つに、持続するのが大変ということがありそうです。どこか、人間の根源に触れた気がします。（大佳）

太陽は沸騰 西瓜はいびつ

秋川 泉

太陽は四季を通じて永遠に近いほど沸騰し続けてゐるといふのは常識。しかし夏の酷暑の太陽は他の季節とは違ひ、まさに沸騰。よく云つたものだ。西瓜の歪と、太陽の沸騰することとは関はりはないのだ。常識ではそれでおしまい。何の感興もわかないかもしれない。しかしこの句は太陽の沸騰が西瓜の歪を呼び出し、西瓜の歪が太陽の沸騰をいやが上にも盛り上げる。破調のリズムで力強くアップテンポで小気味良い。

西瓜のへそがどこにあるか寡聞にして知らなかった。泉さんには西瓜の臍に詳しいとか。お尋ねすれば即回答を得られると思つたが、ネットで調べるのも一興と探した。西瓜の蔓の反対側の茶色のところをお尻と言はずに臍といふ。実が成長するにつれて大きくなり食べごろをあらはすポイントとのこと。

八百屋さんで数多ある西瓜から、西瓜の目利きである泉さんが抱へた大きな西瓜、満足気な泉

さんの顔が浮かぶ作品。(喜孝)

語り部も聞き手も減りて敗戦忌

七郎衛門吉保

何年か前のワイドショーによると、広島の原爆被害の語り部は、直接体験してきた人はあつたことを淡々と喋るけれども、伝聞を語る人は演技がかって大げさに表現するところがあるようです。語り部という役目の難しさを思います。今の時代、戦争は書物の中の出来事でしかなく、美談仕立てにして飲み込むことが増えていると思います。どうか、現実離れた物語には留まらないでほしいところです。(大佳)

「蓬平」寝湯の耳元虫すだく

七郎衛門吉保

蓬平はヨモギヒラと読むと知る。越後長岡の蓬平といふ温泉地に「寝湯」といふものがあるらしい。ただの露天湯に入つての虫の音も風情があり良いものだ。「寝湯」はつまびらかには知らないが、普通の湯の入り方ではなささうだ。耳元で鳴く虫の声は一段と趣が増す。「耳元」がこの句に一段と趣きを添へられた。(喜孝)

空調服^{からだ}身体を抜ける風は秋

篠田純子

空調服は、現在一般的に利用されているものは、ファンによって外気を吸い込んで、服の中に風を送り込むものです。外気を服の中に取り込んで、袖口から出る風が秋めいてきたという作者

です。残暑の候、気候は暑いけれども、秋を感じる繊細さを読みます。また、ファンの風を弱くするなどの微調整をどうしようかと悩んでいる作者の姿が想像されます。(大佳)

不忍の風鈴二千いつせのせ

篠田純子

夏の不忍池にはよく蓮の花や枯蓮を見に行つた。池の傍の蕎麦屋さんにも楽しみに寄つた。楽しい思ひ出である。この不忍池に二千も風鈴が吊るされてゐること。壮観である。見た目も壮観だが、想像するに音もさぞやとおもふ。江戸時代より名所の不忍池。「いつせのせ」が、まさに江戸子の気風のよさのやう。来年は蓮見に挑戦してみるか。こちらは「いつせのせ」ではなく「どっこいしょ」だ。(喜孝)

雑貨屋の去る空室へ西日かな

篠田大佳

商業ビルの一角を占めていた雑貨屋が、閉店か移転が無くなつてしまつた。かつて商品と人で賑わっていたが、今は西日が訪れるばかり。ガランとした空間に栄枯盛衰を思っている作者です。

(なほ子)

ゆく夏やひねもす壁の白き部屋

篠田大佳

白壁の部屋と言つても私室なのかまたは違ふところなのかはわからない。が「ひねもす」と書

いてゐるから日常暮らすところかもしれない。あと一か所は病室が浮ぶ。ひと夏を同じ部屋の中で過ごしたといふ。白で表す行く夏のおもひは何もない空漠たる月日だったなあといいことである。「行く夏」には回頭のおもひこもつた季語である。(喜孝)

朝 一番 塩 辛 蜻 蛉 と 擦 れ 違 ふ

須賀敏子

朝早く出掛けた作者。まだ爽やかな空気の中、一番に擦れ違つたのは……。思わず朝の挨拶をしそうになつたのでは？ これは塩辛とんぼでなくては。ちなみに私のイメージでは、朝が塩辛とんぼ、昼が鬼やんま、夕方が赤とんぼです。(なほ子)

§

昔の小商人は朝一番のお客様の質でその日の商ひを占つたといふ。敏子さんも朝一番を大切にしてゐる。朝一番に遇つたのは蝶々でもカラスでもない、塩辛蜻蛉。塩辛蜻蛉は活動的で見れば元氣をもらえさうだ。朝一番と云ふ言葉が気に入つた。(喜孝)

ひと夏の 楽しき 思ひ 五輪 果つ

都築繁子

「ああ、本当に」と共感しました。連日の猛暑に外出も控え、鬱屈する日々。そんな毎日を明るく楽しくしてくれたのは、オリンピックでした。毎日新聞やテレビの番組表で、その日見る種目を決めて日本選手の活躍に一喜一憂する。それはささやかな連帯感を感じさせてもくれたのだ。日本中が話題にし、暗い世相をその期間は忘れていられたのだ。閉会式の寂しさを覚えている。

次の五輪まで頑張りました！（なほ子）

蓮の葉のうねりの向こう見え隠れ

都築繁子

蓮の萼といふものがある。仏像が坐るところ、台座は蓮の花をかたどつてゐる。それほど蓮の花と仏教は密接。蓮の花には極楽浄土が浮かぶ。掲句は花ではなく、大きな葉を描く。蓮の葉がうねる蓮池。もちろん花も咲いてゐるのだが、蓮の葉の揺れはためくとき、ふとその向こうが見えた。蓮池の奥所かもしれぬが、繁子さんにしか見えないものかもしれない。（喜孝）

今年また東の窓に家守くる

長崎桂子

ヤモリを嫌いという人は、私の知る限りでは少ないようだ。家中の虫を食べてくれるという一点で、蜘蛛なども同類だが、蜘蛛よりは好感度は高いようだ。作者も、窓にヤモリを今年も見つけて、「また来たね」という感じなのだろう。毎年、東の窓に現れるのだ。次の句にあるように、ヤモリは朝日が差す頃にはいなくなっている。昼間はどこに隠れているのだろう、と思う作者である。（なほ子）

高原を埋め尽くしをりカモミール

長崎桂子

カモミールをカモミールと謬つて掲載してしまつた。お詫び申し上げます。このことを会員が

ら指摘されて初めてカモミールがなんだか分からないこと気づいた。

カモミールまたはカモマイルは、キク科シカグク属の耐寒性一年草。和名はカミツレ（加密列）。ロシアでは国花とのこと。中央の黄色い蕊の部分に比してカモミールは花びらが短くかわいらしかった。桂子さんは薬草・飲み物・香りとこの花も興味を持たれてゐたのであらう。高原を埋め尽くしてゐる花がカモミールと知り感動されてゐる。

私は二十年弱？おなじゲームを続けてゐる。『H A I DAY』といふゲーム。ゲームは最初に畑を与えられ米とか大豆を育てる。気が付くと今は38種類にも。桂子さんの鑑賞文を書きをはりゲームをしてゐると、新しい苗が出てきた。〃カモミール〃、びつくりした。そして香水製造機も出てきた。きつと先に行くとカモミールで香水を作るのだらう。不思議なめぐり合はせだ。（喜孝）

スーパーに薪束売れり避暑の町

森なほ子

「避暑の町」は軽井沢のような、山の上の別荘地というイメージで読みました。薪の束は住宅の暖炉に焚べる薪なのでしょうか。それとも、キャンプ場でバーベキューなどをするための薪なのでしょうか。想像は広がりますが、スーパーに薪が売っているという新鮮な驚きを読みました。（大佳）

一枚の木の葉と埃日向水

森なほ子

「置いてきし打ち水日向水の日々」ともなほ子さんは日向水を詠まれてゐる。自然のエネルギー

をいかなく利用した日向水。その日向水を置いてきたとは詠まず、打水や日向水を生活の中に在った日々を詠まれた。盥の水は結構な面積があるといへばある。

日向水ひろぐる雲をうつしけり 久保田万太郎

水を張るとすぐに盥の水は獲物を捉へる。蜘蛛の囲のやうだ。草の絮であつたり、掲句のやうに木の葉であつたり。この句の「埃」には感心した。日向水の温さのやうなものが浮いた埃で伝はつてくる。遠い記憶の中の「埃」が生き生きと甦つた。(喜孝)

台風接近埃拭き取るヘルメット

赤座典子

台風接近に伴つて、非常持ち出し袋の中を点検して、埃を被つたヘルメットも拭いている、という光景と読みました。台風接近の緊張感、あるいは高揚感に、ヘルメットを拭くことで気持ちの昂りを落ち着けているという感情の整理を掲句より感じます。(大佳)

大き栗乗る釜めしと決めにける

赤座典子

私は移動することが難しく、家にゐることが自然と多くなる。家にゐるからといつて退屈をする事は無い。朝一番まづ考へる事は、お腹の空き具合と冷蔵庫の中を描いて朝食の献立を考へる。献立といふほどではないが、朝食が終るとすぐに昼と夜をだうするか、これが苦ではなく、楽しみのひとつになつてゐる。食べることに意を用ゐることが多くなつた。典子さんは食べ物の俳句

が多いといふ印象があるがどうだろうか。駅弁を買ふのもおざなりにせぬ典子さんの顔を浮かべて、楽しくを鑑賞させていただいた。

先日近くのスーパーで北海道フェアがあつた。楽しみにチラシの雲丹弁を買ひに行つたがすでに売り切れ、仙台の牛タン弁当に変わつてしまつた。（喜孝）

古池や蛙飛びこむ水の音

芭蕉

佐藤喜孝

私はこの俳句を知つたのは、きつと小学生のころ、つまり俳句に手を染める以前に知つてゐたとおもふ。この芭蕉の一句で分厚い本が編めさうなほどいろいろな人が書かれてゐる超有名句である。ところがある日、この句を思ひ浮かべて突然「あつ!」と思つた。驚いた。びつくりした。頭では、「古池」といつてゐるのに、もう一方の頭の中の映像は「古池」ではなく、「古井戸」に置き換はつてゐるのである。長い間「古井戸」と思ひこんでゐた自分に驚いたものだ。古井戸に飛び込んだ蛙のことをおもつたら恐ろしくなつた。AIに「古井戸や蛙飛び込む水の音　はいかがですか?」と尋ねたら、「芭蕉の名句です。ナンタラカンタラ」と教へてくれた。私と同じく粗忽な gemini google である。

秋收集

二十日月この坂下りると江戸の町

佐藤 竹僊

大壺に二本の芒蕎麦啜る

七郎衛門吉保

山古志の棚田にゆらり鳥威し

秋風やまだ収まらぬ脳多動

篠田純子

白秋や頭に三ところの手術痕

D N A に生老病死秋桜

「母より」と迷惑メール秋涼し

篠田大佳

街ひとつ均す普請や秋ゆふべ

壁を向きしづかな秋の扇風機

素麺も残り少なく八月尽

須賀敏子

隣より声のかかりて初秋刀魚



新札のお釣り弾める秋祭り

都築繁子

束の間の美しき夕空萩の花

秋薊点点と咲く大野原

長崎桂子

梨むいて友とひとときむだ話

ちぐはぐに住民の家避暑の家

森なほ子

色鳥や行司装束嵩張れる

ひらりひらり色まき散らす鳥威

赤座典子

琺瑯を纏ひて着地鬼やんま

水嵩の増したる川に秋茜

秋川泉

闇迫る芒の波に人の声

喜孝抄

クリスマス



季語あれこれ 「十二月」



十二月は一年のメ。一月から十二月を口で称へてみたら十二月だけ五音。助詞の助けを求めず使へる。使い勝手の良い十二月だ。江戸期の歳時記には十二月はない。『俳諧歳時記』の「しはす」の項に「しはす」の語源を縷々述べてゐるが略す。芭蕉に

何に此の師走の市に行く鳥

がある。鳴く鳥でなく行く鳥が新鮮に読めた。

十二月は師走や極月とも詠まれる。師走・極月といはれると心も忙しくなる。創刊二十余年のあを俳句に「十二月」への向き合ひに変化はあるであらうか。

筆ペンのどれもが乾き十二月
十二月の音かぶさつて餅を搗く
往來の喧嘩見てゐる十二月
死といふこと怖ろしからず十二月
十二月朝の鏡のすぐもる
スムーズに改札ひらく十二月
写実美の憂し美術展十二月
十二月隣家解体鼠来る
勁草のシヅエさん逝く十二月
お人形しつかり抱いて十二月
十二月葬儀の立板太文字に
うそまこと齡かさねて十二月
穿かず捨てぬ靴箱を積む十二月
十二月手足悴む雨の町
差向い酒呑む夫と十二月
人に厭きて十二月の河馬を見る
芋粥炊く十二月八日負の記憶
十二月八日忘れてしまひけり

内藤悦子
堀内一郎
篠田純子
内藤悦子
芝 尚子
竹内弘子
早崎泰江
松村美智子
松本米子
堀内一郎
芝宮須磨子
後藤志づ
竹内弘子
長崎桂子
松村美智子
堀内一郎
鎌倉喜久恵
堀内一郎

蜘蛛の巣を逆光に見る十二月

篠田純子

たたら踏み尻餅をつく十二月

芝 尚子

十二月八日男湯混みにけり

定梶じょう

ぬるぬるはぬるぬるを生み十二月

佐藤喜孝

十二月戦へ進みし回顧の日

芝宮須磨子

十二月人ももみぢもちぢみけり

東亜未

十二月八日銃後はうつくしく

堀内一郎

しら鳥の白で無き箇所十二月

佐藤喜孝

腰紐はかたく結はへよ十二月

佐藤恭子

十二月起きてみる夢ただひとつ

佐藤恭子

敷物の縁につまづき十二月

芝 尚子

住職が銀杏つくる十二月

森 理和

十二月経木の端を紐に裂き

佐藤喜孝

十二月わななく鴉のこゑひびく

佐藤恭子

十二月人の転がる交叉点

篠田純子

日めくりは八月十日十二月

芝 尚子

姿見の真ん中に紐十二月

佐藤恭子

ロボットもをどる世となり十二月

芝 尚子

十二月八日と暫しむかひあふ

赤座典子

掛時計遅れたままの十二月

芝宮須磨子

十二月八日蝶々結びの紐を解く

佐藤恭子

十二月ロボット力士はつけよい

藤野寿子

地下鉄のけんくわわんわん十二月

篠田純子

十二月無線操縦士俵ふむ

藤野寿子

窓まどに朝の息吹や十二月

東亜未

エレベーターは奈落へどこも十二月

堀内一郎

疊のない蕎麦屋の二階十二月

佐藤喜孝

十二月ふはふはふはのホームレス

佐藤喜孝

鰐口のぐあーんぐあーんと十二月

田中藤穂

姉ひとり深くねむりし十二月

須賀敏子

十二月の隣りは闇と思ひけり

堀内一郎

ついに買ふ細めのパンツ十二月

齊藤裕子

山歩きながら十二月八日暮れ

須賀敏子

熊避けの鈴を鳴らして十二月

須賀敏子

ぬのししのうしろは淋し十二月

木村茂登子

紙風船孫への土産十二月

田中藤穂

箕を煽り豆幹とばす十二月

長崎桂子

茹卵十二月は雨ばかり

中川句寿夫

十二月LEDのごと流星群

斉藤裕子

十二月の雪負けた石浦颯と立つ

篠田純子

新参の野良猫がある十二月

木村茂登子

炊飯器に入りっぱなし十二月

佐藤喜孝

戦士等は翼をたたみ十二月

木村茂登子

湯煙りの別府の町や十二月

大日向幸江

十二月の航空公園相思鳥

須賀敏子

佐賀錦焼物求め十二月

石森理和

十二月朝は痛いと言いて

長崎桂子

日に一句とぎれとぎれの十二月

七郎衛門吉保

十二月ビルの上には草が生え

佐藤喜孝

ガラガラと建築資材十二月

石森理和

激励の句誌が届くや十二月

斉藤裕子

看護師の声乾き気味十二月

七郎衛門吉保

紫陽花の葉のはらはらと十二月

須賀敏子

地球儀を欲りつつ過ぐる十二月

田中藤穂

十二月八日うつすらと覚えてゐる

竹内弘子

身支度の夢を見てゐる十二月

篠田大佳

職人のかたき笑ひの十二月

佐藤恭子

とりあへず鍋に水張り十二月

佐藤喜孝

風の色日の色重し十二月

佐藤恭子

建前の木遣朗朗十二月

秋川 泉

十二月烏啼かぬをいぶかしむ

佐藤喜孝

客引の少女手を振る十二月

篠田大佳

レジの人選んで並ぶ十二月

須賀敏子

町医者注射ふるへて十二月

篠田大佳

十二月混む仲見世の善哉屋

田中藤穂

十二月修道院の掲示板

森なほ子

十二月八日と思ふ晝すぎに

佐藤喜孝

十二月まだ見ぬものに冬の水

佐藤竹僊

市役所に柿たわわなり十二月

赤座典子

十二月もう一年が終るのか

田中藤穂

病院へ逃げ込む心算十二月

中川句寿夫

火の色と昭和を恋うて十二月

森なほ子

比喩上のはたらきばちの十二月

篠田大佳

道にあるマスクそのまま十二月

佐藤竹僊

十二月嘴広鶴にゆらぎなし

秋川 泉

十二月紅茶を汲める抹茶碗

七郎衛門吉保

吾を招くばせうの破葉十二月

篠田純子

竹箒短く持ちて十二月

篠田純子

AI音声のニュース淡々十二月

篠田純子

福岡より「うれしか」電話十二月

篠田純子

十二月踏切はさみ人の立つ

佐藤竹僊

想ひ出の曲多くなり十二月

七郎衛門吉保



魚河岸や師走滅法旨い鮎

芝 尚子

なが話して怠けをり師走人

堀内一郎

ゴリラの正坐身じろぎもせず師走盡

堀内一郎

絵の中の半身の鮭も師走かな

木村茂登子

老い二人雑踏に紛れ師走かな

芝宮須磨子

伊東屋に俳優Mを見し師走

竹内弘子

師走人向ふ側から手を振つて

堀内一郎

飢餓画面飽食画面師走かな

芝宮須磨子

煎餅屋は七つ年上町師走

田中藤穂

又消ゆる古き豆腐屋街師走

森山のりこ

あの日から生きて今年の師走かな

芝宮須磨子

復活すイルミネーション師走来る

森山のりこ

どの店も声はり上げて師走かな

鎌倉喜久恵

駅師走酒売る人の赤き顔

赤座典子

スカイツリー日に日に延びて街師走

森山のりこ

大きな地震師走の心ゆれ動く

早崎泰江

久々の深川飯も師走かな

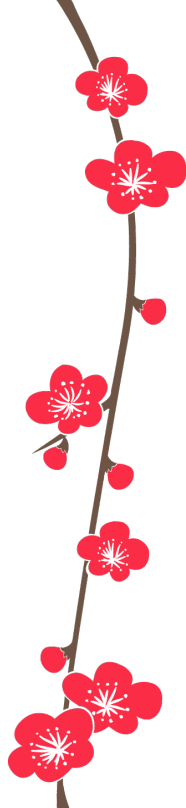
田中藤穂

バスがもう来る頃師走夕やけて

定梶じょう

スタバにて師走の人を眺めをり

須賀敏子



俸給の有りし日懐かし師走かな

大日向幸江

あれは師走小学生で震度七

長崎桂子

師走の身はげます緑茶濃く熱く

田中藤穂

古裂を買ひに師走の京四條

田中藤穂

嬉しくてさびし師走の今頃は

定梶じょう

どの傘も師走の雨を来し雪

森なほ子

翡翠の止まりし杭や町師走

須賀敏子

われもまた師走の歩幅日本橋

篠田純子

師走夫の命日慎みと回顧

長崎桂子

東西線南北線の師走かな

亀田虎童子

師走満月良識の指導者たれ

長崎桂子

極月や露地行灯に導かる

村松美智子

極月や齡とは云へぬ念け癖

渡邊友七

極月や花屋八百屋の移転せる

松村美智子

有難や極月三十一日は

東亜未

極月や騙され笑ふ太郎冠者

芝 尚子

極月や投票率の低きこと

須賀敏子

極月や歯医者に耳も診てもらふ

篠田純子

極月の百合描く壺や友逝けり

須賀敏子

極月や左手使ふ不自由さ

長崎桂子

極月や看板猫のまるまると

篠田大佳

極月やリユックサックに旅恋し

長崎桂子

不安解きたし極月の美術館

長崎桂子

極月やジビエ料理に笑み揃ふ

長崎桂子

極月や突き当りには東山

森なほ子

極月や朱鷺色の庭草の花

長崎桂子

極月の習慣を成す八十代

長崎桂子

極月や築地に数多の民族ぎゆ

篠田純子

春風を受け風の意味悟る稚児

篠田大佳

篠田大佳

親戚の子が小さい頃、小さい子がどうやって世の中のことを学ぶのかをよく観察していました。そのせいか、今でも赤ん坊や小さい子を見ると、大人が当たり前前に知っている何かを理解した瞬間に立ち会うことがあります。ある時乗った路線バスの中で、降り口近くにいた小さい子が、ドアが開くたびに風を受けて、興奮していました。風という言葉は使えなくても、肉体のすべての感覚を使って風を理解したように見えました。小さい子の喜びを春風に託した句です。

俳句で「童心」にこだわるときがありますが、「童心」というテーマは、新鮮な感動、鋭敏な感覚、素直な表現に結びついているように思います。童心すなわち俳句は言い過ぎかもしれません。だが、童心を成す鋭敏な感覚は、俳句の助けになってくれるように思います。

観察のきっかけを作ってくれた親戚の子は、今や成年に近づき、声も低くなり、背丈も僕に追いついてきました。子の成長は早いものです。

あとがき

表紙

私ごとになり申し訳ないが、今月の表紙は屋号を載せさせていただいた。津田青楓先生の亡くなる一年前の揮毫です。

父が店をもったとき某日本画家が竹林七賢人から『竹僊堂』と名付けてくれたと聞いてゐた。が画家の氏名がうる覚えになり申し訳なく思つてゐる。

私の代になり、保田孝三先生が新宿の篆刻講座の帰りがけ仕事場に寄つてくださった。印を刻つたからとあげるよ、と気さくに置いて行かれた。表紙の青楓先生の書とともに私の宝物になつた。父が気に入つてゐる屋号から私の俳号をいただいた。やつとこのごろ「竹僊」といふ号に慣れてきた。

ゆく年

元日の夕方、そろそろ夕飯の支度でもとおもふ16時ごろ、びつくりするほど大きな地震が起こり、その夜はテレビに釘付けになつてしまつた。そして気がつく、もう12月24日だ。一年間何をしていたのだろうと

言ふ速さ、短さの今年であつた。これから『あを』のプリント、年内発送と心づもりをしてゐる。

今年から角川の『俳句年鑑』の『あを』の項を篠田大佳さんに執筆していただいた。機会を作り読んでいただきたいと思ひます。

校正

『あを』の校正陣には今年も大変お世話になつた。私のストレスに対する良薬である。くる年もよろしくお願ひします。

(喜孝)

二〇二四年十二月号

発行日

十一月二十四日

発行所

〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

電話

090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／福井美佐子・ティリエイマ

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普)(店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)

